福島の児童文学者　４０

長田（おさだ） 弘（ひろし）（１９３９－２０１５）

詩人。1939（昭和 14）年 11 月 10 日、福島県福島市新町に生まれる。3 人兄弟の長男。弟のひとりは翻訳家として著名な青山南氏。4 歳のときに父母のもとを離れ、福島県岩代熱海（現郡山市磐梯熱海）の母の実家に疎開する。1945（昭和 20）年、5 歳のときに福島県三春町に転勤した父母のもとに戻る。1946（昭和 21）年、三春町三春小学校に入学する。1949（昭和 24）年に福島市に移り、小学 4 年生から瀬上小学校転校。同年 9 月に福島大学福島師範学校附属小学校（現福島大学附属小学校）[1]に編入する。1952（昭和 27）年福島大学学芸学部附属中学校（現福島大学附属中学校）に入学。1955（昭和 30）年、福島県立福島高等学校入学。1958（昭和 33）年上京し、遊学。1959（昭和 34）年、早稲田大学第一文学部独文専修に入学。在学中に同級生、関根久男と詩誌『鳥』を発刊。1963（昭和 38）年に大学を卒業し、同年 4 月に独文専修の同級生と結婚。1965（昭和 40）年に第一詩集『われら新鮮な旅人』を出版する。1968（昭和 43）年に長男が、1970（昭和 45）年に次男が生まれる。詩、エッセー、翻訳などの執筆活動の傍ら、東京造形大学、早稲田大学、中央大学で非常勤講師も勤めた。子どもの本に造詣が深く、東京新聞・中日新聞などに連載していた絵本・児童文学にまつわるエッセイが没後『小さな本の大きな世界』（クレヨンハウス 2016）として発行された。

エッセー集『私の二十世紀書店』（中央公論社 1982）が第 36 回毎日出版文化賞、詩集『心の中にもっている問題』（晶文社 1990）が第 1 回富田砕花賞、第 13 回山本有三記念路傍の石文学賞を受賞。詩文集『記憶のつくり方』（晶文社 1998）で第 1 回桑原武夫学芸賞、絵本『森の絵本』（講談社 1999）で第 31 回講談社出版文化賞、詩集『幸いなるかな本を読む人』（毎日新聞社 2008）で第 24 回詩歌文学館賞、詩集『世界はうつくしいと』（みすず書房 2009）で第 5 回三好達治賞を受賞。

2015（平成 27）年 5 月 3 日、75 歳で逝去。

子どものときの記憶

長田弘は 1979 年に福島県立福島高等学校での講演で、「わたしは、戦争のときいまの磐梯熱海に疎開し、戦争が終わって三春に移って小学校にはいって、小学校四年生のとき福島に戻りました。わたしの場合、わたしの考え方、感じ方をつくったのは、みなさんとおなじようにして、高校時代までを過ごしたこの福島の街の毎日でした。」[2]と語っている。実際に、高校卒業まで過ごした福島での子ども時代の記憶を長田弘は数多く綴っている。三春小学校の同級生には、登山家の故 田部井淳子（1939-2016）がいた。

戦後の新制小学校の最初の一年生としてわたしが入学した小学校は、東北の山

あいの丘のてっぺんにある小学校でした。ですから、わたしにとって戦後という時代の記憶は、長い急な石段を息を切らしてのぼっていった幼い記憶にはじまるんです。そのときの毎朝一緒に息を切らして長い石段をのぼっていった幼い同級生の一人に、あとで知ったのですが、エヴェレストに日本人の女性として初登頂した田部井淳子さんがいました。[3]

「最初の友人」ができたのも、三春小学校であった。川に渡された水道管を歩いてわたるという危険な遊びを密かに共にした友人は、長田弘が福島市に移って一週間後に、一人で遊んでいて川床に転落し、この世を去ったという。長田弘は「わたしの最初の友人の、わたしは最後の友人だった。」[4]と記している。

4 年生のときに 1 学期だけ通った瀬上小学校については、「一枚の記念写真もなく、何も覚えていない。ただ通学した小道は覚えていた。」[5]という。後年、その地に訪れこう綴っている。

小道にそって小川が流れていた。その小川がいまも流れていた。春の日差しをうつす小川は、細かく光りの粒を散らし、小さな流れがこっちにぶつかり、そっちにぶつかって、小道にならんでつづく。その川面のかがやきに、幼い日の記憶がそのままにのこっていた。

あとにのこるのは、或る時の、或る状景の、或る一場面だけだ。こころにそこだけあざやかにのこっている或る一場面があって、その一場面をとおして、そのときの日々の記憶が確かなものとしてのこっている。そこだけこころに明るくのこっているものだけが手がかりというしかたでしか、過ぎさったものはのこらない。日々に流れさるもののかなたでなく、日々にとどまるもののうえに、自分の時間としての人生というものの秘密はさりげなく顕れると思う。[6]

福島大学学芸学部付属中学校（現福島大学附属中学校）については、次の記述がある。

記憶は、感情よりも、具体的な場所や状景に、はるかに深く根ざしている。そのときどんなことをして毎日を過ごしていたか、何一つ正確におもいだせないのに、中学の三年を過ごした木造校舎のすみずみまで、いまもなお正確におもいだすことができる。そのとき夢中になっていたはずのことを何一つ覚えていないのに、そのときの先生の姿勢や友人たちの表情は、木造校舎の記憶の光景のなかに、いまもはっきり浮かんでくる。[7]

「かなわないと知っている。けれども、もう一度ゆきたい場所は、もう二度とゆくことのできない場所だ。」[8]とし、学校について綴っている。

学校。丘の段々ごとに校舎が分かれていた、丘の上の最初の小学校。まわりぜんぶ林檎畑に囲まれていた、転校していった小学校。中庭にはおおきな池が、校庭にはおおきな藤棚があった、卒業した小学校。

外壁の独特の横板がうつくしかった、古い木造校舎の中学校。そして、ひときわおおきな欅の木がおおきな枝々をいっぱいにひろげていた、長い長い板張りの、木の廊下のつづく高校。[9]

福島の同じ学校を母校とする人たちの中には、表現された文章の中に同じ校舎を思い描き、同様に「いまでも、そのときその学校でおなじ季節を親しく共にした一人一人の顔を、鮮明に、少年たち、少女たちの表情のままに覚えている」[10]人が多数いるのではないだろうか。長田はこう記す。

学校ほど故郷のイメージを叶える場所は、たぶんないのだ。[11]

絵本、そして絵本の翻訳

言葉で表現された作品の中には、絵本の形で表現されたものもある。

言葉の美しい「音」で世界が広がっていく絵本に、『空の絵本』、『ん』がある。「こころという にわにそだつ いっぽんの ゆめのき」を描いた『ねこのき』、「だいじなものは 何ですか？　たいせつなものは なんですか？」と問いかける『森の絵本』、そして「今日、あなたは空を見上げましたか。」ではじまる詩『最初の質問』は、中学3年の国語教科書に採用され、絵本にもなった。心に直接問いかけてくるような言葉の絵本である。その他、「だんだん」という言葉で時と自然の変化を表現した『空の絵本』、言葉の表情をとらえた『ん』など、言葉の音をすくいあげた作品がある。この「ん」という言葉は、長田弘にとって福島の方言につながる特別な言葉であったようだ。「福島の辺りでは「ん」は基本語。ものすごくたくさん「ん」が、文頭にくるんです。大学から家ごと福島を離れてしまいましたが、いちばん変わったことは何かというと、自分の暮らしのことばのなかに「ん」がなくなったこと。」[12]と語っている。

また、児童文学作品も遺している。自分が今何をしたいか教えてくれるおとうさんの“しましまの帽子”を描いた『帽子から電話です』（長新太/絵 偕成社 1974）がある。おとうさんがどこかに忘れてくる度に、帽子自らが電話をかけてくる。最後に帽子が行き着いたところが自由の女神であるところに、独特のユーモアが感じられる。

長田弘はジョン・バーニンガムの『地球というすてきな星』、『旅するベッド』、シルヴァスタインの『めっけもののサイ』などの著名な原作者による作品や、戦火から図書館の本を守った実話にもとづく『バスラの図書館員』や、ビアトリクス・ポターの伝記絵本『ビアトリクス・ポターのおはなし』など、数多くの絵本や児童文学の翻訳にも携わ

った。そして、自らが編集・翻訳した「詩人が贈る絵本」シリーズにおける選定理由について、「この絵本を手にしたという記憶を、できるだけおおくの人と共有したかったから」と記している。これは、彼が翻訳した絵本すべてに通じることではないだろうか。

10 歳のときにアメリカ文化センター[13]で出会った絵本『The little house（ちいさいおうち)』[14]が最初のアメリカ経験だと、長田弘自身が記している[15]。後年、彼は『ちいさいおうち』を、「絵本というのはこれだけのことができるんだというおどろきをおぼえずにいられない絵本です。たった四十ページの小さな本なのに、その小さな本のなかには、「ちいさなおうち」の生きた一世紀近い「時」がはいっています。」と称賛している[16]。子ども時代に邦訳前のこの絵本に出会ったことが翻訳への意欲につながっていったのかもしれない。

長田弘が 70 歳のときに翻訳出版された絵本に、国際アンデルセン賞画家賞を受賞したイタリアの画家 ロベルト・インノチェンティによる『百年の家』がある。廃屋だった家が 1900 年に子どもたちに見つけられてからの 100 年の移り変わりが描かれている。結婚、誕生、戦争、そこで暮らす人たちの喜び、悲しみを見守る家の姿が描かれている。それは、『ちいさいおうち』と同じく、人の営みを 100 年見守ってきた家の絵本であった。

長田弘亡き後、前述の『最初の質問』と同じ画家・いせひでこの絵による『幼い子は微笑む』が出版された。この詩が収録されている詩集『奇跡-ミラクル-』[17]のあとがきにはこう記されている。

> たとえば、小さな微笑みは「奇跡」である。小さな微笑みが失われれば、世界はあたたかみを失うからだ。世界というものは、おそらくそのような仕方で、いつのときも一人一人にとって存在してきたし、存在しているし、存在してゆくだろうということを考える。

言葉を用いて表現してきた詩人が『幼い子は微笑む』の中で、微笑についてこう述べている。

> この世で人が最初に覚える
>
> ことばではないことばが、微笑（びしょう）だ。

2017（平成 29）年、福島県立図書館に寄贈された長田弘全蔵書が長田弘文庫として開設された。長田弘の思索について深く知ることができる貴重な資料群である。詩人・長田弘には詩集やエッセーだけでなく、豊かな絵本や翻訳作品がある。長田弘文庫とともに、読み継いでほしい。

福島県立図書館所蔵　長田弘 絵本・児童文学

長田弘作　絵本・児童文学

出版年	年齢	書名	共著者	出版社	シリーズ名	請求記号		
1974.12	35	帽子から電話です	長　新太/絵	偕成社		913	ｵﾋ	
1996.6	56	ねこのき	大橋歩／え	クレヨンハウス		P	ｵﾜ	
1999.8	60	森の絵本	荒井　良二／絵	講談社		P	ｱﾘ	
2001.6	61	森の絵本　対訳版	荒井　良二／絵	講談社		P	ｱﾘ	
2004.7	64	あいうえお、だよ	あべ　弘士／絵	角川春樹事務所		P	ｱﾋ	
2011.10	71	空の絵本	荒井 良二／絵	講談社	講談社の創作絵本	P	ｱﾘ	
2012.10	72	ジャーニー	渡邊 良重／絵　薗部 悦子／ジュエリー	リトルモア		LA726.7	O3	6
2013.7	73	最初の質問	いせ ひでこ／絵	講談社	講談社の創作絵本	P	ｲﾋ	
2013.9	73	ん	山村 浩二／え	講談社	講談社の創作絵本	P	ﾔｺ	
2016.2		幼い子は微笑む	いせ ひでこ／絵	講談社	講談社の創作絵本	P	ｲﾋ	

長田弘翻訳絵本

出版年	年齢	書名	共著者	出版社	シリーズ名	請求記号		
1993.11	54	クリスマスのおくりもの	ジョン・バーニンガム／さく	ほるぷ出版		P	ﾊﾞｼﾞ	
1994.6	54	ことば	アン・ランド／作　　ポール・ランド／作	ほるぷ出版		P	ﾗｱ	
1995.2	55	いっしょにきしゃにのせてって！	ジョン・バーニンガム／さく	ほるぷ出版		P	ﾊﾞｼﾞ	
1998.10	58	地球というすてきな星	ジョン・バーニンガム／さく	ほるぷ出版		P	ﾊﾞｼﾞ	
1999.7	59	そらとぶいぬ	テッド・ヒューズ／文　デイビッド・ルーカス／絵	メディアファクトリー		P	ﾙﾃﾞ	
2000.9	60	……の反対は？	リチャード・ウィルバー／詩も	みすず書房	詩人が贈る絵本	P	ｳﾘ	
2000.9	60	白バラはどこに	クリストフ・ガラーシ／〔著〕　ロベルト・インノチェンティ／〔著〕	みすず書房	詩人が贈る絵本	P	ｲﾛ	
2000.10	60	おやすみ、おやすみ	シルヴィア・プラス／〔著〕　クウェンティン・ブレイク／絵	みすず書房	詩人が贈る絵本	P	ﾌﾞｸ	
2000.10	60	十月はハロウィーンの月	ジョン・アップダイク／〔著〕　ナンシー・エクホーム・バーカート／絵	みすず書房	詩人が贈る絵本	P	ﾊﾞﾅ	
2000.11	61	アイスクリームの国	アントニー・バージェス／〔著〕　ファルビオ・テスター／絵	みすず書房	詩人が贈る絵本	P	ﾃﾌ	
2000.11	61	夜、空をとぶ	ランダル・ジャレル／〔著〕　モーリス・センダック／絵	みすず書房	詩人が贈る絵本	P	ｾﾓ	
2000.11	61	ジョーイと誕生日の贈り物	マキシン・クーミン／〔著〕　アン・セクストン／〔著〕, イーウリン・ネス/絵	みすず書房	詩人が贈る絵本	P	ﾈｲ	
2001.11	61	私、ジョージア	ジャネット・ウィンター／絵も	みすず書房	詩人が贈る絵本 2	P	ｳｼﾞ	
2001.11	61	人生の最初の思い出	パトリシア・マクラクラン／〔著〕　バリー・モーザー／絵	みすず書房	詩人が贈る絵本 2	P	ﾓﾊﾞ	
2001.12	62	いちばん美しいクモの巣	アーシュラ・K. ル＝グウィン／〔著〕　ジェイムズ・ブランスマン／絵	みすず書房	詩人が贈る絵本 2	P	ﾌﾞｼﾞ	
2002.1	62	子どもたちに自由を！	トニ・モリソン／〔著〕　スレイド・モリソン／〔著〕, ジゼル・ポター/絵	みすず書房	詩人が贈る絵本 2	P	ﾎﾞｼﾞ	
2002.2	62	魔法使いの少年	ジャック・センダック／〔著〕　ミッチェル・ミラー／絵	みすず書房	詩人が贈る絵本 2	P	ﾐﾐ	
2002.3	62	おばあちゃんのキルト	ナンシー・ウィラード／〔著〕　トミー・デ・パオラ／絵	みすず書房	詩人が贈る絵本 2	P	ﾃﾞﾄ	
2002.3	62	リンカーンゲティスバーグ演説	リンカーン／〔述〕　マイケル・マカーディ／絵	みすず書房	詩人が贈る絵本 2	P	ﾏﾏ	
2002.11	63	父さんと釣りにいった日	シャロン・クリーチ／文　クリス・ラシュカ／絵	文化出版局		P	ﾗｸ	
2003.10	63	世界をみにいこう	マイケル・フォアマン／作・絵	フレーベル館		P	ﾌﾏ	
2003.1	63	旅するベッド	ジョン・バーニンガム／作	ほるぷ出版		P	ﾊﾞｼﾞ	
2003.3	63	みんなのすきな学校	シャロン・クリーチ／文　ハリー・ブリス／絵	講談社	講談社の翻訳絵本	P	ﾌﾞﾊ	
2003.9	63	ハーメルンの笛ふき男	ロバート・ブラウニング／作　ロジャー・デュボアザン／絵	童話館出版		P	ﾃﾛ	
2006.4	66	バスラの図書館員	ジャネット・ウィンター／絵と文	晶文社		P	ｳｼﾞ	
2006.5	66	ルイーザ・メイとソローさんのフルート	ジュリー・ダンラップ／作　メアリベス・ロルビエッキ／他, メアリー・アゼアリアン／他	BL出版		P	ｱﾒ	
2006.6	66	ビアトリクス・ポターのおはなし	ジャネット・ウィンター／絵と文	晶文社		930	ﾎﾟ	
2007.5	67	ちいさなこまいぬ	キム　シオン／作	コンセル		P	ｷｼ	
2008.12	69	なぜ戦争はよくないか	アリス・ウォーカー／文　ステファーノ・ヴィタール／絵	偕成社		P	ｳﾀｽ	
2009.3	69	アンデスの少女ミア	マイケル・フォアマン／作	BL出版		P	ﾌﾏ	
2010.3	70	百年の家	J.パトリック・ルイス／作　ロベルト・インノチェンティ／絵	講談社	講談社の翻訳絵本	P	ｲﾛ	
2011.4	71	この世界いっぱい	リズ・ガートン・スキャンロン／文　マーラ・フレイジー／絵	ブロンズ新社		P	ﾌﾏ	
2011.9	71	めっけもののサイ	シェル・シルヴァスタイン／作	BL出版		P	ｼｼ	
2012.7	72	いつでも星を	メアリ・リン・レイ／文　マーラ・フレイジー／絵	ブロンズ新社		P	ﾌﾏ	

長田弘翻訳児童文学

出版年	年齢	書名	共著者	出版社	シリーズ名	請求記号		
1979.11	39	はしれ！ショウガパンうさぎ	ランダル・ジャレル／作	岩波書店	岩波ようねんぶんこ	933	ｼﾗ	
1992.9	52	はしれ！ショウガパンうさぎ	ランダル・ジャレル／作	岩波書店	せかいのどうわシリーズ	933	ｼﾗ	
1989.7	49	詩のすきなコウモリの話	ランダル・ジャレル／作　モーリス・センダック／絵	岩波書店		933	ｼﾗ	
2007.9	67	エミリ・ディキンスン家のネズミ	エリザベス・スパイアーズ／〔著〕　クレア・A・ニウォラ／絵	みすず書房		933	ｽｴ	

[1] 著者自筆年譜によると「福島大学付属小学校」となっているが、『福島大学教育学部付属小学校百年史』（福島大学教育学部附属小学校創立百周年記念事業協賛会 1980）によると、1949（昭和24）年4月1日には「福島大学福島師範学校附属小学校と改称す」（p.42）とあるため、ここでは「福島大学福島師範学校附属小学校」とした。

[2] 『続・長田弘　現代詩文庫』思潮社 1997 p.102

[3] 「ウソからでたマコト」『一人称で語る権利』平凡社 1998 p. 9

[4] 「最初の友人」『記憶のつくり方』晶文社 1998　p.38

[5] 「自分の時間へ」『記憶のつくり方』晶文社 1998 p.85

[6] 「自分の時間へ」『記憶のつくり方』晶文社 1998 p.85-86

[7] 「木造校舎」『小道の収集』講談社 1995 p.12-13
（「私のふるさと 福島市 木造校舎」『文化福島』1988.12　p.9）

[8] 「もう一度ゆきたい場所」『人生の特別な一瞬』晶文社 2005 p.78

[9] 「もう一度ゆきたい場所」『人生の特別な一瞬』晶文社 2005 p.78-79

[10] 「もう一度ゆきたい場所」『人生の特別な一瞬』晶文社 2005 p.79

[11] 「もう一度ゆきたい場所」『人生の特別な一瞬』晶文社 2005 p.79

[12] 「子どもの本の学校」『クーヨン』2014.03 p.64

[13] 福島におけるアメリカ文化センターについては、『福島の教育 平成28年度』（福島市教育委員会）の「生涯学習・社会教育」に次の記述がある。「昭和27.9　仙台アメリカ文化センター福島分館を福ビル三階に創設」,「昭和32.9 福島市児童館を設置（桜木町）、仙台アメリカ文化センター福島分館を併設」,「昭和47.11 児童館を改築し、児童文化センターを竣工、福島アメリカ文化センターを廃止」

[14] 『ちいさいおうち』バージニア・リー・バートン 著 石井桃子 訳 岩波書店 1954の原書。

[15] 「長田弘年譜」（自筆年譜）『長田弘詩集』角川春樹事務所 2003

[16] 『小さな本の大きな世界』クレヨンハウス 2016 p.12-13

[17] 『奇跡-ミラクル-』みすず書房 2013

（児童資料チーム 鈴木史穂）